

『引き離すことはできない』（ローマ人への手紙 8 章 31-39 節）2020.7.5.  
<はじめに> 私たちは、この世にあって日々様々な戦いと課題の中を生きています。しかし、使徒パウロはこの戦いの中にあっても「私たちは圧倒的な勝利者」(37)になると力強く宣言しています。彼とともに私たちもこの勝利の確信を高らかに歌えるでしょうか。

## I 確信の土台

### ① これらのこと(31)

この直前の箇所(18-30)で、今の苦難の先にはやがて来る栄光がある、とパウロは説いています。それは、神のご計画に従って召された人たちが神の子として名実ともに整えられて現れる時です。神の計画、キリストの犠牲、御霊のとりなしが私たちには与えられています。

### ② 対話法

読者に問い掛ける対話法は、彼がよく使う論法で、本書 1-11 章に 40 回ほど使われています。パウロは一方的に自論を展開して、押し付けているのではありません。彼は読者の反論・疑問を想定して織り込みながら、読者と共に考え、答えを見出そうとしています。

### ③ 神が味方

日々の困難と戦いの中に生きてると、「神様、どうして…」と思うことはないでしょうか。かつて私たちは神に敵対していました(5:10)が、今は神と和解して、神の子どもとされています。「アバ、父」(15)は、神こそ私の味方と心底信じる者にしか叫べません。

## II 訴えと反論

### ① だれが訴えるのか(32-33)

神が味方である者に、敵は執拗に攻撃します。彼は「この者は神の敵だっただけではないか」と過去を引っ張り出して来ます。しかし、神が彼を義と認められた(=罪を赦された)のです。そのためにご自分の御子さえ惜みず死に渡されたのですから。

### ② だれが断罪するのか(34)

義と認められたのは神の御前で立場の変化にすぎません。だから敵は粗探しをして罪ありと責め立てます。しかし、よみがえられたイエスが、その立場にふさわしく神の子としてののちを与えて育てようと、今も私たちをとりなしてくださっています。

### ③ だれが引き離すのか(35-36)

敵は私たちをキリストの愛から引き離そうと、ありとあらゆる手を使います。社会環境から来る外的圧力と、それから来る内面の葛藤、社会的な対立からの圧迫・疎外、衣食住を脅かす危機、国と国・人と人の争いは、神の民にも珍しくありません(36=詩篇 44:22)。

## III 圧倒的な勝利者

### ① 神の愛を測るもの(37)

35 節に列挙されている状況の有無でキリストの愛を測るなら、私たちはまさしく屠られる羊、死ぬために生まれた空しい存在です。37 節の「しかし」は重要です。私たちへの神の愛はこれらの苦難と試練で帳消しされるものでなく、別次元にあって揺らぐことはありません。

### ② 神が神であられるなら(38-39)

35 節でキリストの愛を脅かす地上の諸問題が取り上げられました。38-39 節では時間・空間、生死と霊的権威、全被造物にまで広げて問い直しますが、この世界で私たちを神の愛から引き離せるものは何一つありません。神は被造物とその世界とは別格です。

### ③ 神の愛を見つめて

敵は、私たちが神の愛から、人知を超える存在や被造物に目を逸らそうと働き掛けて来ます。しかし神は手を緩めることはありません。キリスト・イエスを与えてくださった神とその愛を見つめるなら、私たちは圧倒的な勝利者です。

<おわりに> 神はその私たちを愛し、救いの道を開き、救い主キリストを信じ仰ぐ者を勝利者にしてください。その勝利は確約されています。だから、神の子どもたちは地上にいる今から主をたたえ、救いの凱歌を心から歌います。(H.M.)